

研究ノート

人はなぜ写真を撮り、そして見るのか？

—13人のインタビュー調査からの心理学的研究¹⁾荒川 歩²⁾

Why do people take and look at photographs?

Psychological research based on interviews with thirteen university students

ARAKAWA Ayumu

Although photographs seem to constitute an important aid to memory, little psychological research has examined the function of the photo. Sasaki, Murakami, & Tanaka (2001) discussed the function of photographs, as expressed by their patients. In this study, we develop the model established by Sasaki et al. (2001), and analyze the reason why people take and look at photographs, and the function of this activity. Thirteen university students were interviewed about their reasons for taking, displaying, and looking at photos. The results showed: (1) People take photos of themselves and their friends when they feel happy, and when they are aware that this happy time will pass; (2) Some people choose their photographs carefully, in order to construct their own, preferred version of events; (3) People usually look at their photos when they are alone; (4) People look at photos when they are experiencing negative feelings; (5) Looking at their photos, individuals like to remember themselves in other contexts and relationships, and experience positive feelings as a result. These findings suggest that photographs constitute an important tool for keeping, constructing, and reconstructing the narrative story of the self.

Key words : photograph, reconstructing, future *antérieur*

キーワード：写真，自己の再構築，前未来

写真は現在のわれわれの生活にとって身近な存在である。野島（2001,2004）は、「思い出」の重要性を指摘し、そのためのツールのひとつとして写真をあげている。他方で志村・鈴木（2004）は、自尊心や意欲が低下しがちな高齢者の情緒を安定させるために行う回想法において、写真を使うことの有用性を指摘している。

これらのことから写真を撮る・見ることは精神的な安定に意味があると考えられる。しかし、これまで一般の人が写真を撮るという行為についての研究は、哲学（Barthos, 1997, Sontag, 1979）や社会学の分野において多くなされ、心理学の視点からの報告はそれほど多くなされていないと思われる。

Burdieu, Boltanski, Castel, & Chamboredon (1990)は、社会学の立場から、写真を撮ることの持つ意味について組織的な検討を行っている。Burdieuらの調査の目的は、当時カメラが

1) 本論文の作成に当たり、日本学術振興会 人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業「ボトムアップ人間関係論」の構築プロジェクトの援助を受けた。

2) 立命館大学人間科学研究研究所研究支援者

高価であったことを反映して、社会的な地位が写真を撮るといふ現象にどのような影響を与えるかに焦点化している。Burdieuらはその結果として「家族的機能」「祝う道具としての機能」などを指摘している。Burdieuらの研究は示唆に富んでいるが、写真が人々の心に果たす機能を考えるためには、実際の使用に基づいてボトムアップ（佐藤，2004）に検討を加える必要があると考えられる。

心理学の立場に基づいた研究は、パーソナリティが撮る対象の選択に与える影響（Ziller, 1990; Dolinger & Clancy, 1993）、写真を撮ることが記憶に与える影響（野村・櫻坂，2002）、統合失調症と撮る写真の関係（中里・坂野・磯部・榎並・日比・青木・米澤・藤本・岡本・祖父江，1988）、一緒に写真に写ることの効果（Burgess, Enzle, and Morry, 2000）、写真に写る際に笑顔を作る割合の性差（Otta, 1998）など、撮るまたは写るといふ側面からのみ検討がなされ、人がなぜ写真を見るのかについての検討は、山下・野島（2001）まで報告されなかった。

山下・野島（2001）は、写真を思い出コミュニケーションのツールと捉えて検討し、「大切な写真」とは、「大切な人」「いい瞬間」「みんな」「久しぶり」「楽しい」「珍しい」「きれい」「うれしい」の要素からなると報告している。しかし、山下・野島（2002）が行った、写真を持ち歩く理由についての質問紙調査の結果によると、「友達に見せるため」という項目よりも「いつでも自分で見られるように」という項目の方が多くことから、コミュニケーションのための機能は写真の機能のうちの一部に過ぎないと考えられる。

また、佐々木・村上・田中（2001）は、病床で患者が家族の写真を飾っている理由について検討するために、患者が写真について語る内容を分析した。その結果として、佐々木らは写真に関する患者の語りには、「引き下げられた自

己価値」「患者を支える家族」「思い出の喚起」「自分自身に触れ直す」「絆を確認し、距離を埋めようとする」といったテーマがあると指摘している。写真の機能を考える上で、佐々木ら（2001）の研究は示唆に富んでいるが、そこで得られた知見を、写真が持つ機能として、他の文脈に転用するには、ほかの状況にある調査参加者から得られた結果を加えて検討することのほかに、2つの問題があると考えられる。

1つ目は、佐々木ら（2001）が撮るプロセスと飾るプロセスの混乱している点である。佐々木らを取り上げた、患者が飾る写真は、患者自身が自ら飾った写真ではなく、家族が置いていった写真であった。このことによって、「患者を支える家族」「引き下げられた自己価値」といったように、主体の異なる要素が混在し、「だれ」が「何の目的」で写真を「撮る」または「飾り」、その結果、「だれ」が、「どのような」影響を受けるのか、という関係が混乱していると考えられる。

2つ目は、佐々木ら（2001）は写真の心理的機能を単一のモデルで表現している点である。写真の機能は、典型的な1つのモデルだけでは説明が不十分であり、写真を見ることについて多様性を含んだモデルを構成する必要があると思われる。

本研究では、以上の2点をふまえ、人が写真を撮る目的と飾る目的、見る目的についても検討するために以下の3点を改良して検討を行う。

1. 調査の対象として、大学生の日常生活における写真との関わりを用いる。
2. プロセスの混乱を避けるために、ナラティブの分析ではなく、撮る行為と飾る行為、見る行為のそれぞれの機能について半構造的インタビューで個別に尋ねる。
3. 写真を撮って見ることについて、その多様性もできるだけモデルの中にも含める。

また、本研究の目的は、佐々木ら（2001）に

よって呈示されたモデルを仮説として捉えて検証することが目的ではない。本研究の目的は、西條（2002）ややまだ（2002）によって提案されているように、佐々木ら（2001）によって呈示されたモデルを継承した上で、異なる状況にある調査対象者のナラティブから得られた知見を鑑みて、モデルを発展させることである。

1. 方法

1.1 調査参加者

調査の募集に応じた、関西圏の私立大学の心理学専攻の大学生1・2年生13名（男性7名：女性6名）。

1.2 インタビュー実施期間

2001年6月下旬から7月上旬。

1.3 手続き

参加者一人一人に対して、半構造的インタビューを行った。調査者は、参加者の許可を得て、カセットテープにインタビューの内容を録音し、同時にメモを取った。インタビューの所要時間は約30分程度であった。

1.4 質問項目

質問の順序や内容は話の流れに任せたが、以下の質問は、その中に必ず含んだ。回答方法は、特に記述のない限り自由回答であった。

撮る行為についての質問 「主に何の写真を撮るか？（自分と友達・友達だけ・自分だけの写真をよく撮るかどうか「はい」「いいえ」のどちらかで回答を求め、そのほかの対象については自由回答で回答を求めた）」「いつ撮るか？」「何のために写真を撮るか？」「過去の写真は必要か？」

飾る行為についての質問 「家にどんな写真を飾っているか？」「何のために写真を飾るか？」「撮った写真をどのように保管するか？」

写真を見る行為についての質問 「撮った写真を、（一人で・親しい友達と・家族と）見る

か？（見るかどうかを「はい」「いいえ」のどちらかで回答を求めた）「そのようにして写真を見るのはどんなときか？」「何のために撮った写真を見るか？」「いつぐらいの写真を一番多く見るか？」

2. 結果および考察

2.1 写真を撮る行為についての結果

撮る対象 友達と自分を撮るという回答の比率が最も高く、逆に自分だけ撮るという人は少なかった（Figure1）。特に日常的に撮る写真に関しては、友達の中でも、「共感できる友達」または「親しい友達」と限定する回答があった。「同窓会や成人式では仲のよくない子とも撮る」という意見があった。このほか、自由回答では、「景色だけでも撮る」「珍しいものがあつたとき撮る」「空とか（を撮る）」という回答があった。

撮る機会 撮る機会を問う質問に対しての回答から、写真を撮る機会には2種類の欲求が背景としてあることが伺われた。1種類目は、遊びや旅行に行ったときや、同窓会・成人式といったイベントのあつたときに「楽しいから残しておきたい」から撮るといった「思い出欲求」であった。もう1種類は、「天気の良い日に散歩に行つて空を撮ったりする」や「あほみたいなポーズしてるやつを撮る」や「最近はテストでやつれる様子を撮っている」といったように、

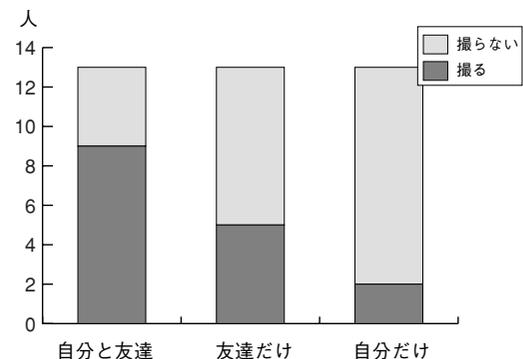


Figure 1. それぞれの対象の写真を撮るかどうか

現実のある側面を誇張して切り取る「現実戯画化欲求」であった。

撮る理由 写真を撮る理由に関する質問に対して得られた回答は、意味単位ごとに分節し、類似した内容をまとめて、カテゴリ名をつけた。Table1は、この分析によって得られたカテゴリ名と、そのカテゴリに含まれる具体的な発言の例を示したものである。「忘却に対するおそれ」が最も多いが、同時に、写真を「撮る楽しさ」や、「その瞬間の貴重さ・移ろいやすさ」をあ

げる人もいた。また、「楽しいから」「楽しかったこと」「楽しむ」といった発話が全カテゴリに共通して認められた。

過去の写真は必要か 過去の写真が必要な理由についての回答を分析し、理由として述べられた回答を内容ごとに分節化し、類似した内容をまとめ、カテゴリ名をつけた。「楽しかった頃の保存」「客観性の補完」「今とは異なる自分」「自分の過去の証」といった要素が、複数の人の回答に共通して認められた。Table 2に回答

Table 1. 写真を撮る理由（得られた回答を内容ごとに分節して集計した結果）

分類名	観測数	実際の発言の例
忘却に対するおそれ	11	「古くなるとそのときの状況があいまいになるから、忘れないように」 「友達をわすれないために」 「(その出来事の) 記念とか、忘れたときに思い出せるから」 「後で振り返って、こんなときもあったなあって、すっかり忘れていた日を思い出すため。こんなこと考えていたんだ」 「心に焼き付けようと思って・・・忘れてしまうのが寂しいから」 「楽しかったことを覚えておくため」 「自分の記録, 自分のやってきた記録」 「本当に楽しかったことがあった証拠」 「思い出に残すため」
撮る楽しさ	4	「撮ること自体が遊び、見て楽しむより撮って楽しむのが重要。」 「その場で盛り上げるため」 「その時間をとめられる。変な顔が面白い。あんときはバカだったねとか」
その瞬間の貴重さ・移ろいやすさ	3	「自分の成長をあとからみたい」 「いろいろ変わってしまうから」 「楽しかったり貴重だったりするから」

Table 2. 過去の写真が必要な理由としてあげられた理由の一部

実際の発言の例	分類名
「楽しかった若い頃の記憶を残しておく」	楽しかった頃の保存・今とは異なる自分
「(記憶と違って) 写真は人に見せられる」	客観性
「(なかったら) 不安, 自分が生きていた過程を証明してくれるものなくなるから」	自分の過去の証・客観性
「ある時期の写真(幸せやった時期の写真)は本当に幸せやった証拠として必要・・・(一部略)・・・写真がないと確信が持てない気がするから」	楽しかった頃の保存・客観性・今とは異なる自分
「過去がなきや, 今の自分がない, 過去を覚えてないと不安」	自分の過去の証
「振り返れないのはいや」	自分の過去の証
「昔の自分を思い出したい, 自分の変化を知りたい, そんな時の自分を見たら, 忘れていた自分を思い出す。」	今とは異なる自分

の一部を示し、それぞれの発話に含まれるカテゴリを右に示した。調査参加者は、過去の自分と今の自分が異なると感じ、楽しい瞬間は消えてしまうかもしれないこと、そして、楽しかったことについての記憶も消えてしまうかもしれないと感じていた。

2.2 写真を撮る行為についての考察

Figure 2に写真を撮るという行為に至る過程をモデルとして示した。写真を撮ることの背景には2種類の欲求があると考えられた。1種類目は、楽しく、その時間が貴重であると感じられるときに撮りたいと思う「思い出欲求」型であり、もう1種類は、現実を戯画化するツールとして写真を用いたいという「現実戯画化欲求」型の文脈であった。

このような機能を写真が持つ背景には、写真の持つ特徴がある。写真の持つ「客観性」や、それが物として残るといった特徴は「思い出欲求」の際に写真が用いられる理由であろうし、写真が持つ、ある一瞬を止めてフレームの中に閉じ込めるといった特徴は「現実戯画化欲求」の際に写真が用いられる理由であると考えられる。

ここでは、「思い出欲求」と「現実戯画化欲求」とに便宜的にまとめたが、実際には、「思い出欲求」型においても、写真を撮られる場合にはポーズがとられていると考えられる。そのため、「思い出欲求」型の写真であっても、現実のある側面が強調されるという意味で「現実戯画化」された側面は含んでいると考えられる。

また、特に女性において、写真を撮られる際に笑顔になるという先行研究（Otto, 1998）が示唆するように、撮られるという行為には、出来上りの写真に対する想像がなされていると考えられる。このことから、写真を撮るといった行為は、出来事の忠実な記録というよりも、「幸せな私」という「過去表象」を積極的に作り出す行為であると考えられる。このことはフランス語の前未来（future antérieur）³⁾の用法と類似した機能を写真が持っていることを示している。

2.3 写真を飾る（保管する）行為についての

結果

部屋に飾る写真 部屋に写真を飾っていたの

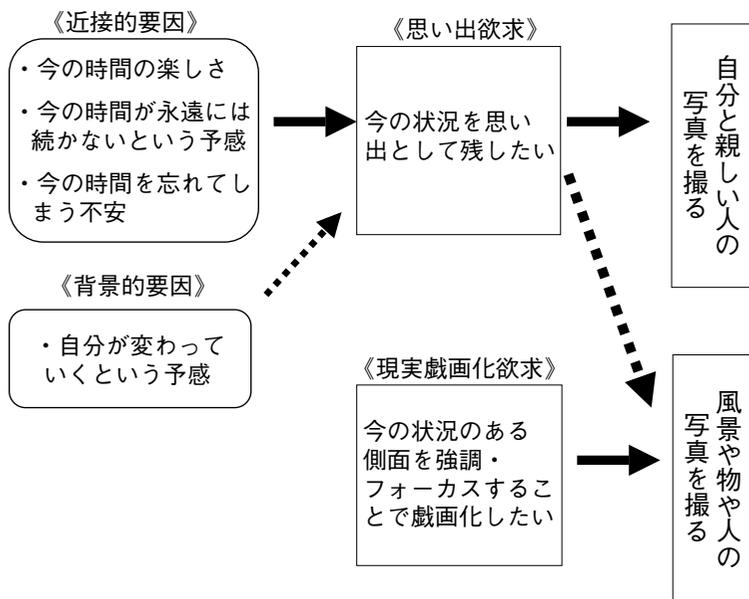


Figure 2. 写真を撮る行為についてのモデル

は13名中8名であった。飾っている写真の種類（複数回答可）は、自分と友達（5人）、自分と家族（3人）、自分と恋人（2人）、自分だけ（小さい頃の写真：1人）、ペット（3人）、友人だけ（1人）であり、自分一人だけの写真が少なかった。

写真の保管方法 写真の保管方法についての質問に対して、11名がアルバムに入れて保管すると答え、残りの2名が「箱に入れておく」、「机に入れておく」と回答した。しかし、「アルバムに入れるけど、ほったらかしもある」、「アルバムは使える写真用、他は、要らない写真ボックスに入れる」「気に入ったのをアルバムに入れておく。残りはまとめておいておく」といった回答があった。このことから、アルバムに入れて保管するのは、一部であり、なんらかの取捨選択が行われていることが伺われる。

写真を部屋に飾る理由 部屋に写真を飾っていた8人について、写真を飾る理由について尋ねた結果、「安心するから」（3名）、「インテリアとして」（2名）という意見があった。また、「じっとはみない」「そんなに注意してみることはない・・・飾ることに意味がある」といった発言に見られるように、日常的には、それを注目してみるわけではないと回答した人が多くいた。

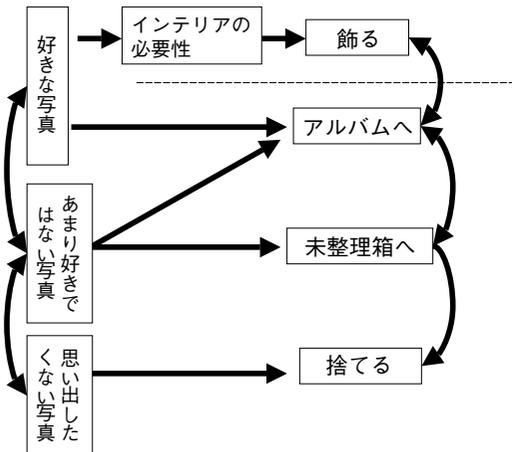


Figure 3. 写真を飾る（保存する）行為についてのモデル

写真を捨てるかどうか 写真は捨てることがあるかどうかについて尋ねた結果、捨てないと答えた調査参加者が8名おり、2名は、「写り方・格好悪いのは捨てる」「前の彼氏の（写真）は捨てる」とそれぞれ答えた。

2.4 写真を飾る（保管する）行為についての考察

Figure 3に写真を飾る（保管する）行為についてモデル化した。現像された写真は、その写真の好ましさに応じて、アルバムに整理したり飾ったりしていた。また、「前の彼氏の（写真）は捨てる」という発言から、写真の重要さは、個人の自己物語や、それぞれの時点における関係性によって変わるものとして考えられる。

また、本論で対象とした大学生が部屋に飾る写真は、佐々木ら（2001）らが指摘しているようなさまざまな機能を期待して飾るというよりも、当初の目的としては、殺風景になりがちな部屋の「インテリア」として飾ることで、「安心する」という程度の動機であると考えられる。このことは、「普段は景色の一部になっているから気にしない」という発言からも伺われる。少なくとも大学生については、飾られた写真が常に積極的に影響を与えていると考えるよりも、飾られた写真が積極的な意味を持つのは、一定の条件下にあるときであると考えられる。

2.5 写真を見る行為についての結果

誰かと一緒に写真を見るかどうか 友達と一緒に写真を見るかどうか、親と一緒に写真を見るかどうかについての質問に対して得られた回答をFigure 4に示した。友達とも、親とも積極的に一緒に見る人の割合は低かった。友達と写真を見ると回答した人が、その機会としてあげたのは、「一緒にいるときに楽しかったことを共有したい」「話題にするとき」「昔の友達と撮った後、写っている人と一緒に」などであった。

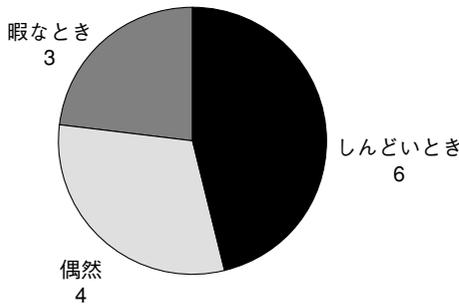


Figure 4. 一人で写真を見ようと思う状況

また、親と写真を見ると回答した人が、その機会としてあげたのは、「実家に帰ったときにその間に起こったことを見せる」「親が来たとき」「行事があったときや、友達を説明するとき」などであった。

写真を一人で見る状況 写真を一人で見ようと思うのはどんな状況かについての回答を分類してTable 3に示した。ここから積極的に写真を見る行為が起るのは、何らかの精神的な負荷がかかっているときであることが読み取れる。

写真を見る理由 Table 4に、写真を見る理由についての回答を分類してまとめた。ここから気持ちや状況の再現について言及されることが多いことが伺われる。

どの時期の写真を見るか どの時期の写真を見るかについて集計した結果、どの時期の写真

Table 3. 一人で写真を見る状況の分類

分類名	観測数	実際の発言の例
しんどいとき	6	「テスト前のしんどいとき」 「落ち込んだとき」 「夜、寂しいとき」
暇なとき	4	「暇なとき」 「ボーとしているとき」
偶然	3	「掃除の時」「偶然（写真を）整理しているとき」

を一番見るかについては人によって異なっていた。しかし、ある一定の時期の写真をよく見る、あるいは、ある時期の写真はあまり見ないと回答した人が、その時期の写真を見る理由・見ない理由としてあげた理由は大きく2つの特徴的なパターンに分類することが可能であった。1種類目のパターンが、「下宿に持ってきてない」からや「そのころはあまり撮っていなかったから」といったように、写真自体がないことを理由として挙げる「制約型」（4名）であり、2種類目が、「（高校の最後）より前の自分は嫌いだから」といった「嫌いな時期型」（3名）であった。その他に、「昔の自分は変わりすぎていて（実感がわからない）」「会わない人が多いから中学校のころ」といった発言もあった。

Table 4. 写真を見る理由についての回答（複数回答可）

分類名	観測数	実際の発言の例
気持ち・状況の再現	6	「写真は断片だけど、頭の中では映像が流れている」 「そのときの自分の気持ちを再現する」 「楽しかったことを思い出すため」 「気を紛らわせるため。写真は昔のことだからそれを思い起こすことで今から逃れられる」
実用的理由	3	「その人にいつ会ったか調べるため」 「客観的に自分を見てみたい」
暇つぶし	2	「暇なときに見る」 「ふとしたとき、何気なく何もすることがない時に見る」
その他	2	「なんでかわかんない」 「見るのは重要ではない」

2.6 写真を見る行為についての考察

Figure 5に写真を見る行為についての結果をモデル化した。本研究では、友達、親と写真を見るかどうかについて質問したが、その結果、山下・野島（2001, 2002）や佐々木ら（2001）が指摘した、誰かと一緒に写真を見ろという行動は、一部の人のとどまった。これらのことから、写真は、山下・野島（2001, 2002）や佐々木ら（2001）が指摘したコミュニケーションとしての機能を持つだけでなく、個人的なツールとしての機能をも持っていると考えられる。また「昔の友達と撮った後、写っている人と一緒に」や「実家に帰ったときにその間に起こったことを見せる」といったように、誰かと一緒に写真を見るのは、相手が、写真に写っている人に対して興味を持っているときに限られると考えられる。このことは「見せるように言われたときに写真を見せる」という意見が友達に写真を見せる場合についての説明で見られたことから支持される。

本研究で得られた結果から、心理的にネガティブな状況にあるときに写真を見るという傾向が認められた。このことは、佐々木ら（2001）が、写真に関する語りの中で「引き下げられた自己価値」についての言及があると指摘した点に近い。佐々木ら（2001）の研究では、「引き下げられた自己価値」と写真を見ることの因果関係があいまいであったが、本研究の結果を踏まえて、佐々木ら（2001）の考察を読み直すことで、一時的に自己価値が低くなったときに、写真を見る傾向が強くなり、そのために、写真についての発話の中では「引き下げられた自己価値」への言及が多くなった、と因果関係を明確に説明することができる。

また、特定の時期に撮った写真を見るという現象が観察されたことから、撮る行為と飾る（保管する）行為だけではなく、見る行為においても、見る写真の取捨選択が行われていることが明らかになった。

撮る行為と飾る（保管する）行為での取捨選

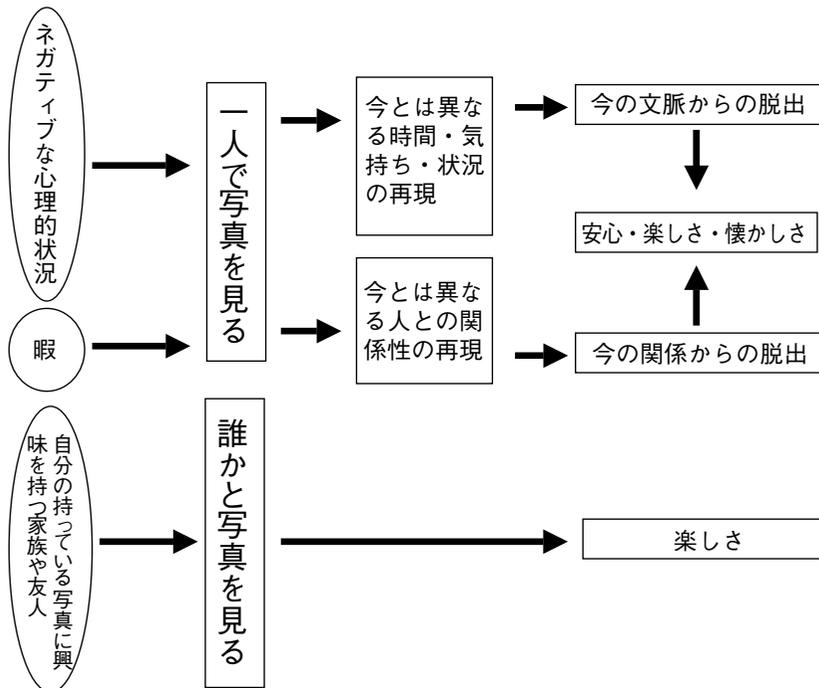


Figure 5. 写真を見る行為についてのモデル

択により、アルバムの写真の中に写っているのは、写真写りのよい、「楽しいとき」の「私」と感じられる写真ばかりである。それをみることにより、比較的ネガティブな状況にいる自分を、「楽しかったとき」の自分のなかに再文脈化しなすことで、現在置かれている閉塞した状況から脱け出していると考えられる。

このような自己価値を変化させる機能は、佐々木ら（1997）が、写真に関する語りにおいて「自分自身を触れなおす」語りとして説明したことに近いと思われる。

松島（2002）は、現在の感覚と異なるような過去の感覚の想起は困難であり、たとえ、「想起した」と感じられたとしても、それは周辺の出来事からの「想起型推論⁴⁾」に過ぎないことを指摘している。これは厳密には「楽しかったときの自分」という感覚は当時の実際の感覚ではないことを示している。その点は、写真に対して取捨選択が行われ、「好ましい」写真だけが残されることがあることから明らかである。

しかし、つらい状況にあるときに写真を見る動機としては、今の感覚とは違う感覚でいたことを想起するだけで十分であり、その点では、松島（2002）の中で酒を飲んでいたころのつらさを繰り返し語ることで現在と過去を分割（division）する断酒会参加者たちとは逆に、写真を見る人は現在の自分とは感覚的に違う自分がいると感じることで勇気づけられているといえる。

松島（2002）は、Reed（1994）を引用し、記憶を想起している状態とは、「自己が分割されてはいるが、分離してはいない状態である」と指摘している。つまり、写真を見ることで、勇気づけられたと感じるのは、現在の状態が一時的なものであり、過去と分離してはいない場合に限られる。このことは、「昔の自分は変わりすぎていて（実感がわからないから見ない）」ということからも示唆される。

2.7 自分と友人と一緒に写っているのはなぜか

本研究において、友人だけ、あるいは自分だけの写真ではなく、自分と友人が同時に写った写真を撮ることが多かった。このことは、自分と友人の両方が写っている写真は、自分が当時おかれていたと感じられる文脈を想像することを容易にし、人との関係の中に自分をおくことができるからだと考えられる。このような、今の対人関係の絶対性から脱け出す装置としての写真の機能は、佐々木ら（2001）の「絆を確認し、距離を埋めようとする」に近いが、本論で得られた結果は、家族、あるいは他の特定へのひとつの集団との関係ではなく、現在と異なる関係があったことを想起することで、現在の関係の絶対性から脱け出す機能があることを示唆するものであったと考えられる。このような齟齬が見られた原因は、佐々木らの研究が家族の中でも親の役割をもった世代を調査参加者としたのに対し、本論では、家族から独立しつつある学生を調査対象者としたからであると考えられる。

2.8 本研究において佐々木ら（2001）のモデルから拡張した部分の整理

本研究では、佐々木ら（2001）のモデルの拡張を行った。以下に、拡張が行われた部分について整理する。

1. 語るという対人的な場面での写真の機能に着目した佐々木ら（2001）のモデルから、個人的な場面での写真の機能についてまで考察を拡張した。その結果、個人的な場面においても、佐々木らの指摘した効果とほぼ類似した効果が認められた。

2. 飾る、および見る行為に限定していた、佐々木らのモデルを本論では、撮る行為にまで広げて検討した。撮る行為を検討することで、撮る時点で取捨選択が起こり、個人の自己物語の中で好ましい写真が撮られることが分かった。

このことは写真のもつ前未来記憶装置としての機能を示している。

3. 佐々木らが調査対象とした入院患者は、比較的長期的に不安で孤独で時間をもてあます状況であったと考えられる。テスト前や対人的トラブルなどで一時的な不安があっても長期的に続くことが比較的少ない人が多いと考えられる大学生を検討することで、写真を見ることを動機づけるのは、患者であることではなく、何らかの不安が原因としてあることであることが明確になった。

しかし、佐々木ら(2001)のモデルにあった「患者を支える家族」というテーマは、本研究のインタビュー中には現れなかった。この背景には、本研究で調査参加者が持っていた写真は基本的に参加者自身が所有する写真であり、佐々木らの調査参加者が持っていた写真は家族が持ってきた写真であったからであると考えられる。写真をもらうこと、あげることの心理的な影響については今後の検討が必要である。

2.9 本研究の限界と今後の展望

本研究では、撮る・飾る・見るの3つに大きく分けてインタビューを行うことで、これらのプロセスについての意味づけや目的、機能を個別に取り出そうと考えた。しかし、どのプロセスについても同じ人が答えたために、インタビューに答えているうちに、その人なりの「写真」についての物語ができてしまい、それが、他のプロセスのインタビューに対する答えにまで影響してしまった可能性がある。

本研究の結果、写真がなにか客観的な事実を伝えるものではなく、撮る・飾る(保存する)・見るの3つの段階のそれぞれの時点における物語を反映したものであることが示唆された。このことから、写真は「思い出」とどまらず、自己のライフストーリー(やまだ, 2000)を捕らえる上でも重要であると考えられる。

また、本研究の結果は、写真を見ることが一時的なストレスを抑える可能性を示唆した。このことは、志村・鈴木(2004)が回想法において写真が有用であると指摘している点と一致する。今後、実際に写真を見ることでどの程度感情が変化するかについて検討する必要があるであろう。

引用文献

- Barthos, R. 1997 明るい部屋: 写真についての覚書 (花輪光, 訳)。東京: みすず書房 (Barthos, R. 1980 *La chambre claire: note sur la photographie*. Paris: Gallimard)
- Burdieu, P., Boltanski, L., Castel, R., & Chamboredon, J.C. 1990 写真論: その社会的効用 (山縣照・山縣直子, 訳)。東京: 法政大学出版会 (Burdieu, P., Boltanski, L., Castel, R., & Chamboredon, J.C. 1965 *Un art moyen —essai sur les usages sociaux de la photographie*, Paris: Les Éditions de Minuit.)
- Burgess, M., Enzle, M., and Morry, M. 2000 The social psychological power of photography: can the image-freezing machine make something nothing? *European Journal of Social Psychology*, 20, 603-630.
- Dollinger, S. J. & Clancy, S. M. 1993 Identity, self, and personality: II. Glimpses through the autophotographic eye. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 1064-1071.
- 松島恵介 2002 記憶の持続 自己の持続 東京: 金子書房
- 中里均・坂野洋子・磯部潮・榎並恭子・日比かおり・青木滋昌・米澤良江・藤本昇・岡本亘弘・祖父江光子 1988 分裂病者による写真撮影の治療的可能性 芸術療法, 19, 49-55.
- 野島久雄. 2001 思い出工学 日本認知科学会(編)「家の中の認知科学」講演資料集 pp.31-41.
- 野島久雄 2004 思い出工学 野島久雄・原田悦子(編著)〈家の中〉を認知科学する—変わる家族・モノ・学び・技術。東京: 新曜社。
- 野村康治・櫻坂英子 2002 写真撮影時の記憶について —静物を被写体として— 日本大学心理学研究 23, 7-12.
- Otta, E. 1998 Sex differences over age groups in self-

- posed smiling in photographs. *Psychological Reports*, 83, 907-913.
- Reed, E. S. 1994 Perception is to self as memory is to selves. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. New York: Cambridge University Press, pp. 278-292.
- 西條剛央 2002 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り — 「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示 質的心理学研究, 1, 55-69.
- 佐藤達哉 (編) 2004 ボトムアップ人間関係論の可能性 現在のエスプリ, No 441.
- 佐々木悦子・村上優子・田中いづみ 2001 病床に写真を置く患者の心理と写真の持つ意味 第32回日本看護学会論文集 看護総合 pp.17-19.
- 志村ゆず・鈴木正典 (編) 2004 写真でみせる回想法 東京：弘文堂
- Sontag, S. 1979 写真論 (近藤耕人, 訳) 東京：晶文社 (Sontag, S. 1977 *On photography*. New York: Picador)
- やまだようこ 2000 人生を物語る：生成のライフストーリー 東京：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ 2002 なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？ — 質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル 質的心理学研究, 1, 70-87.
- 山下清美・野島久雄 2001 思い出コミュニケーションのための電子ミニアルバム提案 ヒューマンインターフェースシンポジウム2001 論文集 pp550-551.
- 山下清美・野島久雄 2002 写真の大切さに基づいたデジタル写真の整理法 — 思いでコミュニケーションのための電子写真管理ツールの提案 日本認知科学会第19回大会発表論文集 pp194-195.
- Ziller, R. C. 1990 *Photographing the self: methods for observing personal orientations*. Newbury Park, CA: Sage.

注

- 3) 前未来的用法を写真の機能と結びつけるに際しサトウタツヤ先生に有益なコメントを頂きました。この場をかりて心より感謝いたします。
- 4) 松島 (2002) によると、「想起型推論」とは、周辺事象の積み重ねを手がかりとした、自分の過去についての推論であるにも関わらず、それが推論ではなく事実として語られる語り（「私は当時・・・と感じた」）である。松島は、このような語り（「私は当時・・・と感じたのであろう」）として感じられる語り（「私は当時・・・と感じたのであろう」）として感じられる語り（「私は当時・・・と感じたのであろう」）と区別して、「想起型推論」と呼んだ。
(2004.10.5. 受理)